武道の文化性
東郷重位（示現流）の伝書(3)

村　山　輝　志*

A Cultural Characteristics of Budo in terms of the Oral Tradition of *Togo-Chui* (*Jigen*-School)

Terushi MURAYAMA*

Abstract

Togo-Chui (1561-1643), the founder of *Jigen*-school, left his legacy 400 years ago in terms of the oral tradition, which aims to explain both the spiritual state and skillful manners of its performers. For that purpose, he applied a number of metaphors based on the philosophies of Shintoism, Buddhism, and Confusianism. Those metaphors seem to help us understand and appreciate the secrets of *Jigen* -school in terms of its spiritual state and skillful manners.

Togo-Chui refers to *"Sansai"* (heaven, ground and human), for example, interpreting it that heaven, ground and human beings are respectively resourceful. He states that human beings are as resourceful as heaven and ground because they were created out of them. This resource, reflecting the original state of nature, is called the state of "selflessness and altruism." Therefore, he claims, human beings, who are originally unselfish altruists, become desirous only after their birth.

In *Jigen*-school, the spiritual state and skillful manners are to help exclude those desires through asceitc practices, to gain the state of "selflessness and altruism," and win the fight against opponents. In short, they explain how to reach the state of unselfish altruism. This philosophy of resource is illustrated, for example, through the God's Spirit of Shintoism, the Reasoned Spirit of Buddhism, and many other metaphors.

This paper aims to culturally study and interpret the essence of *Jigen*-school in terms of the process stated above.

KEY WORES: 伝書，意地，味，虚空，三輪苦

（一）　はじめに

示現流開祖の東郷重位，{永禄４年(1561)－寛永20年(1643)} はいくつかの伝書を書いたといわれる。善吉が重位に授けた伝書は「尊形」，「聞書」，「察見」の三巻[4]のみであったが，この三巻は文字が少

*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

なく，意地玄妙であるが，一般的に理解しにくいので，重位は末世に至って精神が誤解されるのを恐れて，はじめ十巻の伝書を編したが，のち三巻を加えて十三巻の伝書を残したといわれている。彼の伝書は次の通り[4]である。

「尊形」「燕飛書」「聴書」「察見」「聴書抄，上中下巻」「直之書」「切紙」「問答」「御戸之歌共尊和」「兵法伊呂波歌」「長宗翁伝書之表稽古之業数二十六品」この二十六品に重位が加えたものに，燕飛，蜻蜓，置蜻蜓，初手打，長寸之振掛，長寸之越振掛，長寸七打振掛の七品で合計三十三品である。

本論は上記の伝書の内容を後述する順序で考察，紹介するねらいであるので次の伝書[6]をとりあげる。

「聞書」（慶長9年〈1604〉作）
「示現流兵法切紙」（元和7年〈1621〉作）
「示現流秘伝書」（元和7年〈1621〉作）
「燕飛之次第」（寛永元年〈1624〉作）
「兵術察見」（寛永16年〈1639〉作）
「兵法書上・中・下巻」（元和年間作）

以上の伝書を理解することができれば，他書も理解できると思われる。そして上記伝書の内容を解説した書，『示現流聞書喫緊録[3]』（天明元年〈1781〉作）が久保七兵衛紀之英によって書かれており，本書が重位の伝書の秘密とされている内容まで紹介している。例えば兵法書その他では技を最高度に発揮する心境と技の表面的なことについては述べられているが，それに到達する修行方法や過程は技と関連づけて述べられていない。公開はしたものの全面的に「手の内」をみせることを憚られたのだろうか。しかし「兵法書」には，「汀江放船」「三才」「二橋」「二字」の四序を「外の文」であるとし，「六道の刀の柄持」「脛胎」「心去らず，来らず」を「手の内」[6]であると述べている。一般的に「外の文」とは自流の専門とする以外についての教えである。日常生活の場面を含めた心得，急変に対する心構えや技法についての教えである。「手の内」は流儀の教えの中心である組太刀であるので，これと異なる日常の心構え，処置の仕方である。したがって「兵法書」の四序は主に忠・孝の道を説いているので「外の文」といえる。柄持，その他を「手の内」と述べているものの当流の技と心法との関連を述べただけで全面的に公開しているとは思えない。これにくらべて喫緊録では修行方法や敵を打つまでの過程を心法と合わせて詳細に述べている。

筆者はこのような喫緊録の解説を引用することを中心に他書も紹介しながら考察あるいは解説を試みるのである。

（二）　本論の筋書

喫緊録を大別すれば，心法，心法と技の関係，聖賢の称号，段位，他流のこと，重位の五人の高弟，その他について述べられている。

当流では心を意地と表現し，主に神仏儒の要句から意地を説いている。意地を悟れば技は自然と生まれるともいえるし，技から意地を悟る道もある。技と意地は知行であるのでどちらかが欠ければ実施しがたいのである。技と意地を説く順序は大別して五段階に分けている。

第一は当流の本体あるいは源である四序である。序というのは当流の本体で四つの本体があるという。つまり「汀江放船」「三才」「二橋」「二字」の語句をかかげ意地を説き，

第二は「六道，刀の柄持」の語句で柄の握りがいかに重要であるかを，

第三は「時を割き味を悟る」の語句で足の動きや打つ時の時間，間合，

第四は聖賢，段位を示し，品位・階梯を説き，修行の順序と打の方法である。本論では紙数の関係でこの第四は別掲で論ずることにした。

第五は「目付」の心法を説くのである。以上五種の修行段階又は順序の中には第一の四序が含まれ，あらゆる修行段階に当流の本体が存在しているとするのである。

（三）　譬　　喩

当流の心法や技を修行者が理解するためにたとえ話をとりだし，説いているのが特徴である。喫

緊録に当流の奥義は文章に書きあらわしがたい味であるので儒仏道の三道の書から当流の意地を譬喩するため要句を抜き出し，この句に意地を託したと述べているのである。法華経では種々の譬喩や因縁話によって，すぐれた能力ある者に理解させるための物語を展開させるものがある。同経の譬喩は多彩であるが代表的なものに七華七喩がある。つまりあらゆる衆生が仏智と一体となり成仏できる主旨を種々の面から喩えたもので，一喩だけでなく各方面から種々の譬喩にことよせて種々の能力と修行境地の異なる弟子達を指導するものである。これは各別に納得させる意図があったと考えられる。当流も種々の能力と修行境地の異なる弟子を聖賢の称号と四段の別に分け各段毎に種々の譬喩をことよせて説いているのである。例えば当流の本体である四序の譬喩である「汀江放船」は初段，「三才」は二段，「二橋」は三段，「二字」は四段という具合である。更にこの他にも各段毎に譬喩をことよせている。

（四） 意地（理）と味（極意）

キーワード
朱子学，理気二元，本然の性，大極，怵惕惻隠

当流の伝書には意地や味の語句がたびたび使用されている。本論をすすめるにあたり，この語句を考察する必要がある。

意地の意味は心の働きを司る眼耳鼻舌身意の第六意識，又その働きをする器官としての意根，気だて，気性，あるいは自分の主張や行動を押し通そうとする心，又は創作する時の心の働きであろう。国語辞典では第六識が個人存在の全体を支配し認識作用の根源であり，万事を成立させる場所であるが故に地という。意にもとづく心，意志の意味に近い。

喫緊録では意地は理，技は事である。理と事の本源は一つであり，二つはないのである。水は万里を流れて海にそそぐ，水が湧出れば自ら万里につづき，両岸できるが如く自然の理である。元来この意地は天地の間にあるので技十二打も存在する。そして天地の間にこの意地と技があれば人の心にも意地と技がある。天下に性外のものがないからである。つまり意地（理）と技（事）は不遍であり，事と理は一体的なものと考えている。これは天地に性外が無く，又人にも性外が無いから不遍になることができる。つまり性は心でもあり，五常と同意であるので無念無想になることの心法を主に儒道から取入れ，次いで仏道，神道から心の問題を説いているのが当流の意地である。第一の四序四種の譬喩のうち，「三才」は主に儒学の理を，第三の「時割」は儒学のうち主に「気」と「呼吸」との関連で述べ，仏道では第一の四序のうち「汀江放船」と第二の「六道柄持」がある。他は儒道を主に三道から意地を説いているのが特徴である。

したがってここでは儒道を中心にした意地と味を述べ，気と呼吸との観点からの意地については「時割」のところで，仏道を主にした観点からの意地については「六道柄持」のところで論じる。

(1) 意地（理）

儒学の元祖は「孔子」「孟子」である。孔子は「仁」を中心生命とし，孟子は「仁義」を中心とした。その教は四書五経などにより今日伝わっている。四書の大学，中庸，論語，孟子の精神が当時の人々の精神を培ったことは大きく，この精神が武道にも影響を与えたのである。精神の中心は五倫，五常の「仁義礼智信」と君臣，父子，夫婦，長幼，朋友の関係であった。五倫，五常について次に述べる。

朱子学は，周濂渓，程伊川，朱熹らの宗時代の思想家達により形成された新儒教であり，四書を重視し，理気二元により宇宙の原理や人間学を説いた。朱子は人間の性のうち，理から生じた「本然の性」に絶対善を認める性善説をとなえた。性を内容的に述べると「仁義礼智信」の五常であり，この性は未発であり，静であり，理であった。未発とは『中庸』の「喜怒哀楽は情也。情の未だ発せざるを中と謂い，発して節に中(あた)るを和と謂う」のそれであり，情が発せざる以前の絶対の「静」なる状態をいっている。これが未発となり，動と

なると情が現れるとしたのである。

『喫緊録』では上述の朱子学の性と仏道のそれを意地として述べている。

天帝（天）は天地未分前より天地間を主宰している神霊である。誠の本体である。無極にして太極から動じて陽となり，動極まって静，静にして陰となる。静極まって動となり，一動一静互いにその根となり，天地を形成し，中間に気化したのが人物となった。当流はこの天地人を三才といっている（後述）。故に万物は元来一理気の流行にて生成した。人は天地の道理にかなって仁義礼智信の本性を成就した。程氏はこれを心，性，天，一理といい，張子は虚と気を合わせて性，性と知覚を合わせて心と述べている。仏道では意識，先儒の怵惕惻隠の仁の心をさしている。神道では天神地祇は工(たくみ)が無いので天地の功用を為して尊い。それ故に当流が心を執行する時は儒では喜怒哀楽，未発の中，仏では本来の面目で思いを通して工夫することである。言葉をかえていえば，生死の問題（相手と対峙）に直面した時，剣の技術のみで解決できない，感情が心を乱すのでこれを取り除き，無意識の世界で自己を安定させようとする，「本来的自己」の探求まで昇華するのである。彼らは瞑想修行を通じて混沌の世界に身を据え，闇の先の秩序をみいだすのである。つまり万物は陰陽二気により構成され，この二気により本性を生じ，この本性と事が一体であるとしているので，当流では気が発動する情を心意識に分け，意識が心を動かして悪道に入安きものであり，当流の意識はそれ故「阿頼邪(あららしき)識」（万法縁起の本となるもの）の心意識の三つを区別する意味である。『仏教語大辞典上』によれば，つまり唯識説で説く最も根元的な識の働き，覆われて潜在している意識，心の奥底に蔵されている識など，七識が生じるための根底となり基盤となるもので根本識ともいう。前の瞬間の心作用の印象をたくわえ，次の瞬間の心作用をひき起こす。

当流の性，心について『兵法書』では次のように述べている。

性事

性も心である。人間生まれ出ざる以前より，人生まれ出れば必ずあるべき定である。心は脛胎の時，天より入来て，次第に物を少しずつ覚える。たとえば幼児が恐れを知らずに崖淵など危ないところへはたと行くのをみて，あっと思うのが性であり，よくみた後，敵の子であれば，まあよかろうかまわずにと思うのが心である。

心意識

是三とも心なり。人の心中に心は人の身を司どりて動かざる物なり。万事心が人の正体なるものなり。意と識とはうごきて色々にかける物なり。悪道は入安きものなり。

壁頭の草根は能知レ乾能知レ坤。

壁頭の草根とは，ぬりかべに生たる草なり。此草，かべのきうなる所にをい出るが，さかさまにもをい出ず，よこにもをい出ず，天にむきて生ず。根をば下へはるなり。能乾を知とは，乾は天なり，坤は地なり。是皆天地をしる自然の道理なり……。

初地則極(しょちそくごく)

初地則極とは，真言宗の論儀の書の名なり。初地とは，人間に生まれ出る所の儀なり。則極は死て去る所なり。兵法の味にいへば，意識のはなれたるが初地則極なり。其故は，生まれでたる所が死のはじめなり。然間心ばかり有物なれば，打べき事は心にあり。

煩悩は家の犬，不レ去レ討とも。

煩悩は家の犬，うてども去ずとは，万づ我身のさまたげらるる物ども なり。先欲心の数々，其外，意識なり。家にある犬は余所へをかんとすれども，本の家に帰るなり。それを此の如く云り。人間の心に悪き心は，すてんとすれども捨られず，只意・識と云物が，はなれがたければなり……。

深夜郭公の一声，不レ起二妄念一

深夜郭公一声と云は，夜ふけて，ほととぎすの一声を聞て，あっと思，今のは何かと思所，むねに何もなし。爰を以て仏心とせり。不レ起二妄念一とは，あっと思所に，もう念はなしと云り。

その他の譬喩をあげれば,「仏難〻成仏易レ成リ」「刹那モ不二殺生一入二地獄一如レ箭」「重類，傍布（ぼうふ），傍生（ぼうじょう）」「水落当二車輪一」「心不レ去不レ来」「案山子察レ心」「鳥声転心也」などが，心，性，意・識について分かり易く説明されている。

くり返すようであるが,「心」その他について，上述のことを図式化すれば下記の如くになる。

天 { 理(形而上) / 気(形而下) } 人－心 { 理－道－未発－静 / 気－器－已発－動 } { 性(仁義礼智信) / 情(惻隠･善悪)→欲 }

虚と気を合わせて有性心，これは仏道の心と同義であり，儒道では怵惕惻隠の仁を指すことは前述したが，儒者である張子は知覚と性を合わせれば心というのであるが仏ではこれは意識の意味を有すとしている。意は知覚が出るはじめでまだ象がないのをいい，有性心は解脱しうる性のあることをいい，一所に住することなく心を生ぜしめよというのであり，何物にも執着することなく心を働かせる。無執着の心行，無念無心の自由な働きである。識は意が盛んになれば象形をみることができる。仏道の意識というのは儒道の性情を縮めた心をいうので意識といえば善悪を発する。それ故仏者が心を修める時は意識の発するところを正明にすれば心の助けとなり，心は明正になる。しかし元来，心意識は無形であるので浮雲の如く，ただちに発起し盛微になる。心明が少なく暗がりが多ければ意識は力を得る。そしてこれを制禦する道を知らなければ意識が盛大になり，一身の主人となり心を逆に使役するのである。このような心を除く道は難しいので中庸では，前述の如く喜怒哀楽未発の中をいう。その意味は喜怒哀楽（情）がまだ発動しない（それは性であって偏りがないから）から中といい，発動して皆節度にかなうのを（それは情の正しいものであってもとることがないから）和という。中という時，天下の大本（天命の性，天下の理はここから出てくる道の本体である。和というのは天下の達道）である理を性という。

性は人が天からうけた生まれつきの性質，性命であり，又人は木金火水土の五行の性質があり，仁義礼智信の徳の全体を指す。この未発の中を『大学』では誠意，正心といい，仏道では意無く識なく，母の胎内に胎生している時の気象を観念工夫せしめて是をたより，踏みどころにして意識を除く心の光明を求めるのである。兵法でいえば敵合にのぞんでは勝つ，負けるを思わず，恐れず，侮らず，ただそのままに打つことである。そうすれば意識も心光に随い，心光を助け，心光に力を添えるので敵に勝つことになる。心は変り性となり，意識変り心となり，仏道では強剛にしてこれをとどめないのを性というのである。

(2) 味（あじ）（極意）

ここでは「味」の意味について考察するのがねらいである。重位の書には多くの「味」の語が出現する。「二字の味」「太刀の味を書たるを手の内という」「兵法の味をいへば意識のはなれたるが初地則極なり」その他である。

重位の伝書である『兵術察見』に当流の大意は味であると述べ，その意味を紹介している。

心は仏・法である。味というのは心である。伝法というのは人為を加えない仏性に目覚めた自己であるという。その本来の面目というのは前述した如く，天地のいまだ開かれていない虚空，大極のことである。これが心である。故に仏説でいう仏身法身虚空の如しという。これには名前はないが主人公，仏心，性，法と名付けている。世に多くの経伝があるが少しも別の意味をもつものはない。主人公の主人は本来の面目で寒暑を知り，貧着するのは妄年である，妄年は出入し易い。これを悟り得た心と性とを「味」といい，若し敵に近づいた時は性と心があり妄年がなくなる。別にいえば一所に住することなく何ものにも執着することなく心を働かせる無心で自由な働きといえる。そしてその後の有性心を本来の面目と名付け，これの打つ太刀を味というのである。『喫緊録』にある「味」について紹介する。

「敵が切出すやら不二切出一やら知らねども，あっと感じ，無念無想に我も切出すとも不レ覚切出たる

に空中にて合っし敵を切臥せたる味也」

あっと感じ，無念無想に敵を切る。又は本来の面目になり敵を切るを別に言えば，生死を切る利剣というのである。このような生死を切る利剣は悟りの心境であるので技の修行を通じて自在無碍の心の働き，つまりいかなる場合でも心がとどまることなく延びひろがって相手と対応できる働きとし技の妙用を生みだす根源となる。

（五）四　　序

キーワード

渡世。脱生。七情。鶏鳴。日月星。

四序とは「汀江放船」「三才」「二橋」「二字」のことであり，その意味内容は互いに関連し，一貫している。序というのは当流の本体のことである。汀江放船の語句の内容については「儒学」の項で述べた如く，王守経の経文。三才，二橋，二字は大学の経文。中庸の天命の章から共に借用し，当流の意地を含ませている。これらの語句に人生一代の言行所作のありようを述べた。つまり人の渡世は大海に船を出し，それを操作するのと同じであると述べている。

(1)　汀江放船

月船君

身船我

人の渡世は大海に船を放つが如くの意味の汀江放船にたとえて「身船は我」を戒めとし，「月船は君」を悟るために修行する。汀江は水涯であるので相手と合わせる時の源であり打ち向かうときの初めである。放船は纜を解き船を押し出すことであるので相手との眼とじっと見合うや否やずっと蹈寄り相手を切臥せるところである。つまり目と目と見合わせるや否や無念無想にして迅速に打出し，打ち留るの味である。この無念無想の味を「月船は君」を譬えとして説くのである。つまり自分がまだ生まれず，母胎にある時の位（くらい）であり，これが無念無想の本体で意識のない心を指していうのである。月船とは母の胎内に九ヶ月胎生しているので名づけ，君とはいまだ意地や工（たくみ）がない状態を尊敬して名づけた。万物の上に抜き出た高い位置にあるを意味する。脱胎時は無念無想であるの出典は，善吉が弟子の重位に伝書として送り届けたという『深秘心底抄』にある。

身船は我というのは生誕後すぐ意識の工があるのを指していう。脱胎の時は無念無想であるが生後は自然と一身を保つ知覚が生じる。知覚とは外界の対象の性質とか形態，関係などを意識する作用であるために，喜怒哀楽愛悪欲の七情がおこり心身を苦しめるのである。耳目鼻により明を暗にする。富貴，長寿，安楽を初めとして無制限の願いが生じる。これらは本心から出ることなく知覚からでることが多いので意識と名づけ仏道では賤しむのである。無念無想の大本はそれ故，この月船は君を本源とするのである。

一生一年一月一日一瞬目に聞くの語句を譬えにして，意識の工を一瞬目に切断することを『兵法書』では説く。人は七才頃になると一生の生きかたを考えて学ぶ時である。誤らず稽古すべきである。一年に聞くとは一年の計は陽春にあり，一月に聞くとは，一月一月，月は過ぎゆくのでその一月を大切にして過ごすべきである。一日に聞くとは一日の計は鶏鳴にあり，その一日は万事暁天より分別すべきである。一瞬目に聞くとは，瞬はまたたきである，これが兵法の心得に肝要の語である，ひとまたたきしないうちに意識の工を切断し早く打当たるべきである，仏法を悟る時もこの一瞬目のうちである。ここでの聞くとはしたがって悟る意味である。又，人は忠孝の大道から一賊党を殺すの類がある。つまり男子の仕事には高下，大小，厚薄があり，長期間から一瞬目に聞くことにかわるものもある。当流を修行し技を伝え，月船は君，身船は我さらに心意識の界を悟り，即座に身船は我の意識を切断し，月船は君の心の無念無想の本体になるところに落着するのを一瞬目に聞くという。敵合一機の間に意識の工を切断し，月船は君の無念無想になり，ただ仏性に目覚めた本来の面目で打つのである。心影流は防具をつけて竹刀で打合いをする，迅速を熟する芸であるがつなぎ船に竿を指すの気持ちで用心しすぎである。

痛くなく，迅速であるといえるが心術の修行でなく，もちろん月船は君の意地を知らないので当流に対すれば頭をあげることができないのであると批判している。

(2) 三才

三才に日月星，儒釈道，天地人の三才がある。当流での三才とは天地人の三つの才覚をいう。天は高く地は広く果てしない。人はこれにくらぶれば大倉の中の米粒であるが，しかし人は天地に匹敵する心をもっている。日月星は自然にして工がない古より今に至るまで昼夜四時流行循環して万物を照らし育て成就する。つまり天地の間を主宰し続けた神霊であり，儒者のいう理気である。誠の本体が無極にして大極から動静して陰陽に分かれ，天地となり中間で気化して人物となった。故に天地の万物は元来一理気が流行して草虫といえども天帝がこれを命令して生育主宰したのである。人は工のない天地に次いで生じたので天地の道理に順って仁義礼智信の本性を成就した，これが心，性と呼ばれ，往古来，今も心というものがある。

心役レ形則不才也

心勝レ形則才也

心が形のために役せられると才がないのである。すなわち心は人の主人の如くあるので形である意と識を使うべきなのに，形がいろいろ心を使って悪の道に入役させる。心が意，識の使いになれば心が迷い鳥，獣と同じになるという意味である。逆に心が形に勝てば，水心明然として情欲の為に身が覆われることなく，身を随えて才を発揮する。前者は精粋でない気をうけて生じた人のことであり，心が正明でないので耳目口鼻からの情欲が偏倚であるがために欲を起こし，これが本性を屈曲して私欲の工を以て世を渡り獣に陥ることをいう。後者は情欲の為に性（人道）が被われていない人のことであり，天帝地祇の誠をそのままうけた性と天地霊明の気と合わせて心と為す人であるので天地の才と並びうる値を示しているのである。

当流にこの三才をとる本意は常の言行が天帝地祇人の性に恥じず，君父のために敵に向かい無念無想にして工なく心の本体である天帝地祇をとるためである。そして太刀をとって敵に向かうとき，二心なくただ敵を殺すべきと思う心ばかりにしてすっとすすみ切臥するのを直にして動かざるという，すなわち天地人，三才の直（天地の二気工無くして流行するのを直という）なる躰であるというのである。

(3) 二橋

「三寸にして丈五の橋を乾に懸け，坤に懸ける」

この語句を譬えにして「二橋」の味を説くのである。三寸にするとは人が胎内にある時は眼耳鼻舌意の五根が起こる時から髪の毛が生ずる。一根に三分宛ずつ生ずるので一寸五分生じた時に誕生する。三分を十倍して三寸。丈五というのは一丈五尺，三尋の橋のことである。一寸五分を十倍して一丈五尺になる。三寸のせまい橋に対して丈五はひろく又は高い橋をいう為である。

乾坤は天地である。三寸巾の橋を地上近くに懸けるのは恐くないが丈五の高さにこれを懸ければ恐い，ところが丈五の橋を丈五の高さに懸ければ恐くない。恐いのは意識が心にとりつき落ちる気持ちがするので渡ることができない。地橋を渡る時は庭を歩くのと同じで心が落ちつき意識がないのである。本来，天地の橋を渡るのは同じ気持ちであるべきであるが意識の有無により上述の如く異なる。

兵法でいえば天橋の心は自分より上級者の敵を相手に，地橋は臆病者が幼稚の者を敵にする心である。二橋は微塵でも嫌うところがあれば手足の技が遅くなる。嫌疑なく，本来の面目で心を強明に技迅速にして打つべきである。橋を蹈渡るべきでなければ橋でなく空である。しかし橋を掛け渡してあれば真の空ではない。勝負合にこの二橋をとれば相手が切出すか否か分からないが，あっと感じ無念無想に自分も切出すか否か分からないが覚えず，切出した時には空中で合わせ相手を切臥した味である。空中胞生の味，有にあらず空にあらざるの味，心去らず来らずの味である。

(4) 二字

忠・孝

忠孝を尽くすのが人の道である。尽くすことを知られようとしたり，反対に尽くすことを知られないようにするのは天理に合わず，動心があるといえる。ただありのままにすることが直道である。人は生まれた以上忠孝を尽くす定めであるので今更，別に心があるべきではない。忠孝を知らせたくも思わず知らざれとも思わず，誠心を尽くして仕え奉るを忠孝，これ動せず，敵合に用いれば敵に向かって打つべしとも思わす，打たざるともおもわず，その道に当たることである。敵を打つべしと思えば，はやその間毫髪の滞の隙がある。窮犬人を喰うの諺がある。犬に何の心もなく窮する故に己も知らず，立戻り喰うのである。あらかじめ犬に立戻り喰うべき形がないため追う勇者も技が出ず喰われるのである。この犬は喰うべしとも思わず，喰わずとも思わず，喰いたるところ工がなく動かないのである。当流の十二打を得れば打つべしとも思わず，打たざれとも思わず，あるいは又我知らず鬼神も知らず，敵なお我が形を知らないので打つべきところを打つのである。

（六）　六道，刀の柄，譬

キーワード

地獄　餓鬼　畜生　修羅　人界

日月行動一円相　慳貪（けんどん）　神霊　傍布　真人

敵と戦う時は無念無想の月船君の心と柄持の刀と殺人剣の三神の合一が必要である。この三神が巡りて端がなく日月行動一円相にしてひとつである。日月の行動とは日月が東より出て西に入る，又東より出る，懈怠なくまわるので一円相の形である。一円相は剣の道では欠けることのないように打ち，相手には欠けるように打つことが基本である。

六道柄持の第一地獄界は慳貪（けんどん）の二字が因である。他から物を貪り，我物を惜しむをいう。人間が貪る物はすべて地より出る，すなわち米金銀銅などは地から出る，食物もしかり，衣類も木の葉から糸綿を生ずるので地の界である。獄は人をしばりいましめるをいう。欲心ある者は自分の物を惜しみ，世上の重宝なものを貪り求め我物にしたいといつも思い，人道には眼もくれないのである。貪求の物を得ることができなければ胸に炎の燃えあがるように心身を苦しめるのである。法華経では釈尊が地獄と極楽をつくり在世時，善悪事をすればあの世で極楽，地獄になることを述べているが当流のそれは異なり現在存生のうちにある地獄である。これを当流の意地にとれば，敵に向かう時は太刀の柄を強く握り，柄を砕けるとも放さないように，又掌と柄とはつくりつけのように握る，敵と打合わせても微塵もゆるむ事がないように強く握ることをいう。脇指は片手握りのため相手と対する時ゆるぎ易いものであるので注意を要する。

第二の餓鬼界は希望，希求を因とする。人間はすべて望みをもっている。仏道で人が死んだ時，祭の施主がなく水火花香経などの手向に逢わずして餓えた鬼を餓鬼という。人は死んでも神霊があるのでせめてもの，水と火ぐらいの手向をうけたいと希望するのである。この餓鬼界に次の四類がある。

有財餓鬼は財を多くもっているが猶不足と思うことである。たとえば衣食とりたくとも節約しているがために希望が叶わないことを因として一身を苦しめ，安心のないことがこの因によって起こるのである。兵法の味でいえば心中では早く打つべきと思いながら，それを打たんとする心が思うようにならず，恐い心があるので相手を打つことができない。物をもって使用することが叶わなければ打つべき心はあるが打得ないたとえである。敵の変化技を知っているが無念無想で対せず十分の打所を求める場に技が遅れて打たれるのである。

無財餓鬼とは財がなく乏しいが欲心があり，一生の間，物を欲しがる，あるいは盗人になり身を亡ぼす。兵法の味でいえば打ちたい気持ちは尽きないが打つべき方法を知らない，財を持たずして物を使いたいと思う心と同じである。敵の技により変化して打の道に達していないことである。

端厳餓鬼（たんごんがき）の端厳は物を美しく色どる男女各々が衣裳を飾り，姿をつくるの欲心があることをいう。兵法の味でいえば，急場に処する振舞を大切にす

るため，足ぶみするので打つことが粗になる。これは飾る心があるからである。当流はそのままに打つべきであり，技に善悪はないのである。

類劣餓鬼は現在ある病気で苦しむことであるが人並に様々のことを望むことをいう。人の芸をうらみ技の進展がないことを歎く人である。当流は技こそにわかに進展しなくても心術の進展がある，心から術に達することを得なければ類劣餓鬼に陥るのである。

第三の畜生界は無慚，無愧を因とする。畜生とは獣であるとともに獣の毛虫の総称である。無慚，無愧の慚，愧も恥と読むので恥なしの意味である。人間は恥を知っているが畜生は知らず，恥を知らない人は飲食牝牡のみを知り人の行うべき道を知らず。兵法ではこの恥ざる心を用いる。敵に会って恥じない心をもつのを利用する。恥も不覚も忘れ，ただ一筋に敵を追いつめ殺人の念力強く人を残らず切臥せても猶，飽き足らない心，久しく戦っても技の疲れないところを示す。

第四の修羅界とは闘争のことであり，自他格別を因とする。自他が各々，別の心をもち闘争が起こる。修羅界とは常住座臥，近くに敵味方を分け置き，一生涯の間，心を苦しめる人をいう。元来自他とを隔ててみることから格別が起こる。ここから人に勝つことをのぞみ負けることを嫌う。平等にすれば心も薄くなる。当流では自他の心を強大に養い敵に勝つことを求める。強大になれば敵する相手を天地雲泥の如く懸隔てたる故に敵を打つことができるのである。

勝負は時の運である，あるいは負けても正々堂々と戦えば苦しくないという。当流ではこの語句を嫌う。自分を歎いたり失礼すれば誰であろうと父母妻子を捨ててもこれに報いなければ常に苦しむからである。修羅界は太刀を強くもち天地を貫く太刀力を教えるのである。

心さえ敵を恐れずば自然と技が出て敵を打つものであるとして技を習得しない人を仏道兵法という。他流の傍布（畜生心の武士）よりも卑拙に陥入る，身命を投げ打って勝つという念をも捨て，ただ大火の中に入る心で敵を打つのである。

第五の人界は主人，父母をうやまい，子を哀み，人をうやまうをいう。これが人の直道の行いである。又，前のいきさつを聞いて理解し，その心を得た人を人道という。人界ではかたよった意地や技をも自得した上で敵の変化により十二打で応ずることである。

第六の天人界は通化自在を因とする。天人界とはものを早く悟り得るので通化自在という。又天人とは儒道では聖人，荘子では真人の類をいい，仏道では通化自在を得るを天人という。前後のいきさつを理解し，太刀を打出さないうちに打当たるべき事を心にもつことを天人道という。いかなる大変・卒然の間に出てきても道理に通達しているので才力が通達しないことはない。

以上をまとめれば，地獄界では握りを強くすること，餓鬼界は打込みを強くすること，畜生界は肱力が疲れないこと，修羅界は打が盛んに強いこと。以上の四界に精神を尽くしてこれを得れば，人界の敵の打の変化に応ずることはこの中に有する。人界を修行し熟せば天人界の通化自在の神通力が得られるのである。

（七） 時を割きて味を悟るの事

キーワード

秒，絲，忽，毫，釐，雲耀

寄足の法則。四玉の事。躰の息，用の息。

呼吸と瞑想。聞レ梅酢生レ口。

気と呼吸

天地万物は気によって構成されており，この気の変化によってすべての自然の変化が生じ生も死もこの気の作用によるものである。人は気によって生成されており，陰陽，動静，清濁，明暗といった組合わせによりできている。これは天地の構成と全く同じである。しかし天地において気は自由であるが，人においては意識があるので気は逡巡する。このような気をいかに制禦するかということが問題である。天地と同じ状態にするための方法，手段として重要な位置を占めているのが呼吸である。

当流には気と呼吸についての意地を「四玉之事」

「躰の息，用の息」「風と手」「呼吸と技」「呼吸と瞑想」「盛風力」などとさまざまな語句と観点から説き，最終的には「寄足の法則」に落着させているのである。この法則については後述するが，呼吸，気，間合，と打突のスピードとの関係を説いているといえる。

「四玉之事」のなかに，気の働きについて説いている。心意識気の四玉のうち，身の主人である心が老名の意に物事をいいつけ，意が聞いて識の細工人に申しつける，識が才覚を働かせて物をたくむのである。気は三玉に物をくばる役であるのですべてのものを調べて心意識にくばり渡して物事をすすめるというのである。兵法でいえば心意識をすすめるのは気であるので，気がまずすすみ，早く強く打つものである。つまり心の中に四玉があり，心→意→識の過程を気がすすませるのであるから，心→気→技の過程を指し，心と技，理と事，心と形の一体性を気によって実現させることになる。

「躰の息，用の息」の句からの説ではどのように説いているだろうか。切紙では次のように述べている。

躰の息とは空の息也，空とは我身をはなれたる所を云い，人は十月母の胎内に有て，気をつめたるが，はたと生まれ出る時，息をほっとつき出して空にかえす。又それを空より我にあづかりて内へ引入る。是あうんの二字也。あとつき出して又うんと引入る。此二の出入絶えざるを以生とす。

用の息とは我にあづかる息也。然ば兵法に声をかくる事第一儀なり。息を空に皆かへすべからず。息をつめて半分ずつ残して懸るべし。是あうんの二字をたもつ身成故也。

上述の如く二気の出入りで一身を養うので一身のことを風台といい，一身の動き働くことを風力であるということから壮年の人を盛風力と名づける。それ故に仏教では空風を躰の息といい，我息を用の息というのである。当流では声を曳(えい)と掛けるにも声を尽くしてかければ気が微になり打も強くない。打の教法についていえば，用の息とは自分があづかる息である。ところが兵法では声をかけることが第一儀であるので息を空にすべて返さずに息をつめて半分ずつ残して懸るべきである。又別な表現では掛声をかける時，せいを残してかければ力強く，打どころも固い。つまり「えい」と声をかけて息をつめて打てば力が出て強く打てるというのである。このように呼吸（息）を気の出入りとして捉え，天地と人間との交流の関係を示している。躰の息は生命維持のためであり，用の息は兵法に利用する息を説いているのである。

「躰の息，用の息」における躰と用は儒教の体用論が根拠となり，体と用の因果の関係が風と波との関係であるとすれば，水と波との関係をいう。体とは根本的，一時的なもので用とは派生的，二次的なものであり，これを性と情との関係で述べれば，性も心であり，この性は人間の生誕以前より，生まれ出れば必ずあるべき定めである。心は脛胎の時，天よりきて人に宿るが，性は心より早く定まる。くりかえすが，たとえば，子供が崖淵など危険なところに行くのをみて「あっ」と思うのが性であり，よくみればその子が敵の子であったので，まあよかろうと思うのが心であると説明している。性と心の意味が少し異なるがこの二つを身の主とするのである。このような心というものも体としての性と用としての情から構成されているとされる。この性は「性即理」の立場でいえば宇宙，万物の根拠である。情とは未発の静の状態にある性，已発の動の状態といえる。したがって躰の息とは性としての呼吸といえ，人間が生命を維持するための自然の摂理としての呼吸といえる。これに対しての用の息とは情の呼吸，意識的に調節された呼吸とみることができる。当流では天地生成の気，万物のものとしての気が人間の生命を宿し，それを維持してさらに人間の身体運動にも関わっているのである。

以上，気と呼吸の意地について述べた。これが身体活動との関わりについて具体的にどのように説かれているのであろうか。当流では「寄足の法則」がこれに該当する。敵に対する時の自分の脈，息，距離（間合い），歩数の関係を示したのである。蜻蜓打の遅足，寄足の遅足は数千人の敵を打臥する味であり，時を割くの教則は遅足を論じること

から雲耀の教えに至るまでである。当流で最も大切であるので秘密の教えであると述べている。

法則は脈一動二足半歩が敵に向かう寄足である。二足半とは二歩半のことであり，間になおすと二間三尺に定る。つまり敵と対する時は太刀を蜻蜓にもち，腰をすえ，縄を張る如くの身形にして，脈一動の間に二間三尺を飛行することである。注意すべきは寄足を早く求めれば身形と蜻蜓の姿勢が崩れ，逆に合わせれば遅くなる可能性がある。運動は一機であるので寄足が遅い時は蜻蜓の打出しも速くない。小足に静かに歩数多く寄らせ蜻蜓打にするより大足に踏すれば姿勢がよく，腰がすわり，揺れないのである。二間三尺を飛行する場合，はじめて踏み出す左足は三尺，次の右足左足は各々一間である。最後の左足の一間と打太刀が三尺であるので，計九尺となり，この九尺の間に万変の技が出るのである。人間の生命活動は脈拍，呼吸など多くは周期的なくり返しによって表わされる秩序的でリズムをもった現象である。そしてこのリズムが相手との関係で相対的なものとして認識され，自分のペースで相手を巻込む。間は人と人との空間や技と技のあいだの時間に大別できる。相手との関係は千変万化であるが，この時間と空間を拍子，リズムや距離で測ることにし，当流では相手との間を二間三尺にとり，技と技の間を九尺とし，脈一動と二動の間に勝負することを説いたのである。

脈一動二足半の時間はどのくらいか，当流は独自に時間を割いている。時とは一日の十二支の十二時，刻は十二時を百等分すれば一刻である。分は一息脉四動半の間である。当流では一分を時間でなく，ひと息の時，脉が四回と半打つとして呼吸と脈で表現されている。これは，人それぞれの息は一身の動静により遅足があるので一息脈四動半は平和時の値であるとしている。そして脈四動半を基準にして脈一動の間の盛風力行歩は二足半の急事到来時の早く走る速さである。ちなみに現代の時間にかえると一刻は約15分であるので一分は10.7秒である。10.7秒の間に一息と脈四動半はあまりにも遅すぎる。筆者の経験では通常五秒が一息で脈四動半である。これは一刻を八十四息にしたのであるが『皇極経世書』では一刻百三十五息を基準にしているものもある。しかし当流では一刻を八十四息にした由来は考えていない。考えてみると『荘子』の大宗師篇では，真人の息は踵である。衆人は喉で息をする。この語から修行者が結跏趺座（けつかふざ）し，躰を閑にし，心を静かにして気を沈め，眼を半開きにして本来の面目を悟るための数息の法といえる。八十四息での一刻は息を閑にとるので起こるのか研究すべきである。しかし当流の一分で一息脈四動半の関係は無関係に考えればよく，一息と脈四動半の関係を重視すべきである。およそ，人生の鼻息は一身の動静により遅速があり，一息の間に脈四動半は通常，安静時の値である。この値を基準に前述の二間三尺の寄足の法則を定めたのである。

一分は現代の時間にすると約10秒であることは前述したが秒は分を八で割いたひとつで呼吸する一息を八つに割いた一つが一秒になる。現代の時間でいえば1.3秒である。絲は秒の十分の一であるので現代の時間では0.13秒。この時間が盛風力の三尺太刀打の早さである。この絲の早さを基準に進歩する次第を示すのである。つまり忽（こつ）は絲の十分の一，現代の時間では0.013秒。更に毫（ごう），釐（りん），雲（うん）耀（き）と続く。絲の早さと釐の早さを物にたとえれば絲は紙一枚を錐で突きさす速さであり釐は紙三尺を重ねたのを突きさす速さであると説明している雲泥の差がある。当流はこの釐の次に雲耀がある。これは稲妻，電光の早さであり，この早さになると明鏡の心，水月の技以上の無形の心の光物にして打の技もこの光物に助けられて迅速にすすむものである。つまり，心は明鏡止水の如く，静明になるものである。静明であるので，敏速に物に通ずる。心に意識がある時はたとえば鏡のくもるように水の動揺する如く，万物を写すといえども分明でない。分明でないので迅速でなくなる。無心となって自然の理に任せた時の心境が明鏡止水の境地，この無念無想の境地が極意であろう。「聞レ梅酢生レ口，是則味之姿也」の心は他人が梅酢の話をすると梅のすっぱい味を知る，知るや否や口中に潤い酢が口中に生ずるが如き，その速さを察すべきである。

寄足の法則を守り，これに熟する稽古は座敷に高さ二尺五寸の台を置き，座に立木又は俵を横に置き三間の間を二足半に寄って打つことであり，これは秘密（口伝）としている。

（八）目　付

目付とは現代的にいうと，はるかかなたに存在する物の全体をみて構え，弱点がどこにあるのか見破ることである。このことは対人的な動作においては時間，空間などを正しく認知して相手の動作を予知することと同義である。したがって運動を効果的に遂行するための重要な要因となる。

当流では目付の心法を見，観，蛙，中道の語句から説いている。

見は身の主人であるので使うべきでない。下人が主人を使うべきでない，この意味は見は心を動かさずにみることである。つまりここでの心は意・識によって工が働いていないので無念無想の状態であり，太刀を打つときの本躰である。ただ物理的に物の遠近，黒白を知るのみであり，これを違えず分別するだけであるので心がみるのと同じである。これだけのことで本躰の心を使うのは敵の方へ使うようなものであり，太刀が遅れる。心を散らさぬことが大切である。

観は物を隔ててみることをいう。目にはみえないけれども心目でみれば，千里の間も一瞬のうちにみることができる。ましてや三尺の的にあっては猶更のことである。

蛙は動くものをすぐみる。蛙は世間を眼にして自分の眼を世間にする。というのは蛙の眼は常にあいているが目を使わずに目の際（きわ）により動くものをみつけてぱっとたべる。兵法でいえば敵のこぶしが動くのをすぐに激しく打つ，これを蛙の目付という。蛙は全体をみているようにみえるがしかしみえていない。そのかわりある一瞬の動きを関知する能力がある。「蛙の頬冠（ほほかむり）」という諺がある。蛙の目は背後にあるので頬冠すれば前方がみえないから目先の見えぬことに譬えるのである。

中道は言葉や意味（志）以外のことをみることである。仏教語大辞典によると「中道」の意味は二つの対立を離れていること，断・常の二見，あるいは有・無の二辺を離れた不遍にして中正なる道をいう。つまり絶対真実の道理，正しい行法とでも述べることができるので見観蛙の目付にとらわれず，これらを越えた不遍にして中正な目の使いかた，心のくばりかたと思われる。

（九）あとがき

示現流の伝書の内容を理解すれば，大概他の伝書も理解できるのではと思った。何故ならば当流の後世の人々は重位時代の伝書をもとに相伝していたからである。しかし当流伝書そのものが神仏儒の観点から心・技法を説いているので筆者にとって大きな負担になった。当初は本伝書を書いた流祖の東郷重位自身が曹洞宗の善吉和尚の弟子であったので僧侶ではないかとさえ感じたのである。もしそうであったとすれば，筆者も僧侶になるぐらいの気持ちで勉強しなければ，理解に苦しむだろうと思ったことである。伝書を研究するうちに曹洞宗関係あるいは他宗派と深く結びついた内容でなく，さきの三道から説いたものであることが分かった。それでも仏教用語（句）は多くみられた。たとえば，「示現神通力」「左肱切断」「中道」「六識」「六道」「阿吽（あうん）」「無念無想」「五字厳身観」その他多くの語句が引用されている。

儒道では四書の大学，中庸，論語，孟子から語句を引用し当流の心法を説き，神道は和歌にみえる。

伝書には「意地」「味」の語句がたびたび使用され，意地は三道から心法を説く内容，つまり理，気の理論である。味は極意の意味であった。

又譬喩を使用して修行者に理解させるために苦心したことが伺える。このことは他流にくらべあまりにも多くの譬喩を使用しているのが特徴である。たとえば「深夜之帯之事」という譬喩がある。いつも人は着物に帯を結び馴れているのでよそ見をしながら結ぶことが出来る。これと同じく太刀をいつも打っておれば打つ事は早い，のたとえである。

伝書の心法はさきの三道の観点から四序に分け

て終局的には「無念無想」で相手と対峙することをあらゆる角度から譬喩を用いて説いている。技術は，柄の握り，間合いと足さばき，目付さらには打の技を解説している。特に技術に関しては現代の科学的研究成果と匹敵するものがあると思われる。寄足の法則では呼吸と気と関連させて左，右，左の順序で約一間ずつ飛び最後の左足一間と太刀三尺の計九尺が万変であるので勝負の時であると強調している。そしてこれの稽古は台をつくり，その上でするとし，柄を握る時は強い程よいことを例をひいて述べているのである。現代の科学で実験して証明してみたいと思うのである。

最後に本論と他流伝書と比較を試みるのが今後の課題である。このことに関しては多くの研究者が武道学研究に発表している。岡田一男，中林信二，大保木輝雄，志沢邦夫，前林清和，湯浅晃，藤堂良明の諸氏である。上記の人々の論文をくり返し読ませていただいた。そのために示現流の伝書の理解をはやめたのである。

引　用　文　献

1．赤坂弥九郎政雅（善吉和尚）
深秘心底抄　手書　慶長年間
これから数巻の伝書が出来た

2．平川彰也８人　P. 209－215法華思想講座・大乗仏教４
S. 60年刊　第２刷　　発行所　春秋社

3．今村嘉雄，日本武道全集，第三巻，同朋舎，S. 57　第一版第一刷，京都，P. 158－283

4．久保七兵衛紀之英，示現流聞書喫緊録
手書　天明元年（1781）　全書
同　　示現流聞書喫緊録
附録系図　P. 13枚目　P. 14枚目　P. 22－23枚目
手書　　天明元年（1781）

5．国史大辞典編集委員会，国史大辞典第７巻
吉川弘文館　　S. 61　第１版第１刷発行　P. 369－371
東京

6．森　章司，仏教比喩例話辞典　S. 62
初版発行　東京堂出版，東京　P. 18－21

7．中村　元，仏教語大辞典　昭和50（1975）刊
東京書籍KK　東京　P. 960（中道）

8．東郷重位
聞書　手書　慶長９年（1604）
示現流兵法切紙　手書　元和７年（1621）
示現流秘伝書　手書　元和７年（1621）
燕飛之次第　手書　寛永元年（1624）
兵術察見　手書　寛永16年（1639）
兵法書上・中・下巻　手書　元和年間
50枚目　位照が宝暦一年伊地知喜兵次に授けたもの

表1　兵　法　書　元和年間著

上　巻　（外の文）					
譬喩の語句		和歌	天台の四観	段位	称号
汀江放船 渡世するのは大海に船を放つと同じ	月一船君，月を船にたとえて月船。 身一船我，我が身を船にたとえて身船。 聞二一生一，聞二一年一，聞二一月一，聞二一日一，聞二一瞬目一 心・意・識	三　編	有　門	初　段	賢
三　才 三才に三つあり。 日，月，星 儒，釈，道 天，地，人	天地人の三才をさす。人は天，地にくらぶれば太倉の米つぶであるが，心があるので，天地と同じである。 心役レ形則不才也。 心が形に使われずに心が形を使うべきだ。	二　編	空　門	二　段	
二　橋	為二三寸一丈五橋懸レ乾懸レ坤 地に細い橋をかけても渡りよい。 丈五の橋も同じ。三寸の橋を天にかければ恐ろしい。	三　編	非有非空門	三　段	聖
二　字 忠・孝	忠　節を尽くすのにありのままに正直に奉公すること。主人に分かるようにあるいは分からないようにするのは心が動いている。 孝も同じ。 割時知味事 時刻分秒糸忽毫釐 七情之事 綾之事 深夜之帯之事	な　し	亦有亦空門	四　段	
四之目付之事	見，観，蛙，中道 性　事				

中　　巻			
技名と譬喩の語句			和歌
左臂切断（初段） 和歌２編	立	五音相通，破レ人為レ人，生為レ人　心立亡レ敵，本立為レ道 千里の行	なし
	双	尺郭縮レ身為レ延 五音相通	2編
	越	五音相通	1編
横指横切（二段） 和歌１編	寸	迫則有二方寸内一 天遊行則，飛行自在成故，広大	1編
	満	開則満二三千大世界一迫則有二方寸内一。 孩児取レ月，抛二銀盤一。	なし
	煎	出二火宅一。七力。秋毫不レ隠心地直。未塵，金塵，水塵， 兎，羊，牛，きしつ，みやくしつ。 入星，見明星，悟道。	2編
磯　月（三段） 和歌２編	平	漁夫辞。聞レ聖賢不レ捨。門前金剛断二瞋拳一。身是菩提樹， 心如二明鏡台一，時々勤払識，塵埃莫レ令レ成。	2編
	安	菩提本無レ樹，明鏡亦非レ台，塵埃莫レ令レ曳。	なし
	行	馬上続二残夢一。日月行動一円相。寄の足事。	1編
雲　耀（四段） 聞二梅語一生二酢口一，味無レ姿有レ姿 物猶能通。 和歌１編	軽	最も早く打当たる味が軽。	なし
	道	刀を抜きふりあげず，中より打出す間を道という。	なし
	真	花者草林の盗人，月は一天の盗人。鬼にこぶをとらるる。 木刀寸尺の事，柄９寸３分，み２尺５寸３分，合３尺４寸 ６分。	2編

下　　巻　　（手の内）		
譬　喩　の　語　句		和　歌
六道刀柄持譬	地獄界　→　慳貪	
	餓鬼界　→　有財餓鬼，無財餓鬼，端厳餓鬼，類劣餓鬼	
	畜生界　→　無慚（ざん），無愧（ぎ）	
	修羅界　→　自他，各別を因とす。	
	人　界　→　五常，人道	
	天人界　→　通化，自在を因とす。	
	刹那不二殺生一入二地獄一如レ箭 三毒　→　貪，嗔（じん），痴	
	重類（じゅうるい），傍布（ぼうふ），傍生（ぼうじょう）	
	四王之事	
	三世不レ可レ得事	
脆　胎	舞声（ぶせい），拍子共無レ窮。幔幕（まんまく），簾中（れんちゅう），心心（さざめく）二一同一。	1　編
	仏難レ成仏易レ成	1　編
	壁頭草根能知レ乾能知レ坤	
	水落当二車輪一	
心不レ去不レ来	来不レ入レ門去不レ出レ戸	
	雪山寒苦鳴鳥。	1　編
	案山子察レ心	2　編
	大地為レ削，白象牙。普賢毛穴，出二山河一	
	初地則極	
	煩悩家犬，不レ去レ討。菩提山鹿，不レ来招。	
	鳥声転心也	
	深夜郭公一声，不起妄念	

表2　重位聞書　慶長9年6月15日

尺蠖の身を縮むるはのべんが為也		
汀の舟を浮かべよ胸中に		
汀江放船，口伝あり，用心の事也		
万里立行，起一一歩一一		
左肱切断 異躰は動ざる物 用は動く物也	立	うちは初手のごとし
	双	立切の心なり
	越	こしうちなり
横　指 横　切 天　地	寸	つつむる時はうすんの内に有，但し打は半月のごとし
	満	しらくる時はさんぜん大せん，せかいにみちみてり
	煎	こんちん，みちん，こくちん，うのけ，七ちん也，しつちのけ，うんのけ，からすむ
見		
観　とは闇なるときは，心手にあり		
蟇（かえる）　とは動くひやうしにあり		
中道		
眼・耳・鼻・舌・身・意，六使六盗とて人間の身に有事也		
人に三輪のくあり，但し母の体内に有時の事也，聖人の心		
滄浪の水濁らば足を洗へ，水すまば冠をあらへ，賢人の心		
髪をあらって冠をはじく，湯をあびては衣をふるう		
中道，過去，現在，未来		
心に対面と云事あり，答云，首もなく，尾もなく，前もなし後もなし		
磯　月 早　経	平	とは同等，平とて何も平等の事也
	安	安き身となれる，はててぞうれしけれ，子あるもなきも
	行	とは日月光陰の行のごとく也，蟹歩前後左右行

石中に火有りて不レ出ば空し，胸中にありて仏不レ知ば空し，しやう悪に気味あり，不レ習空し
太刀につるの足，つれざる足の事
懸の得は少しをも可レ用
引の得は，多分なり共可レ捨
非レ懸，非レ待　中道なり　非はいんの心なり
有財，無財，類劣，端厳，四餓鬼と云也
気は三玉の賦なり，心意識，人間の躰に也
ゆたに三つ，くしに一つ，ゆしに一つ，口に一つ，気に一つ，七箇とは是なり
一箭は折安し，十箭は折れ難し
天温，早土，多力息
出切刀道鉄輪の如二三足一，一闕不レ可レ得

表3　兵術察見　寛永16年3月吉日

春，夏，秋，冬，四土用の各節の人の悪心の顔の特徴	春	眉上と眼下赤筋，顔色白，声平調
	夏	眉上黒筋，唇黒，声盤鍾調子通，左右の手かく
	穐（あき）	眉上赤筋，唇紅，声黄鍾調
	冬	眉上黄筋，顔色黄，声一越調
	四土用	眉上・眉下青筋，顔色青，声双調
兵術の十相	①左よりのあくびは，後物をたくむ心有 ②右よりのあくびは，懸物をたくむ也 ③直なるあくびは，弘眼也，何の心もなし ④ため息は胸に大事なる儀思う也 ⑤津（つば）を呑者は大事と思う也。懸物，大事成儀か，能々用心有べし ⑥空をしげくみるは物を気にする。狂気出る ⑦物を空聞きして，ない事をいう者大事をもつ ⑧つねより調子高く物いふ者にも用心有 ⑨調子さがりて物いふ者悪心有 ⑩笑事人にすぐれたるも悪心起こす也，心許すべからず	

夫為二当流永遠一南無八幡大菩薩示現流守給と云文字を句の上に置，卅一字の作二詠哥一，神前奉二手向一物ならし	なによりも先学びなん武士の	六の道ひとつももれずうつ太刀の	初めよりあち打たてのけいここそ
	千早振神のこころと打太刀の	まちもすなかかる心もさだむなよ	むやくぞと人はいふ共此みちを
	たそのはのくらき心も此道を	いたりてはさもありぬべし稽古には	星は北水はひがしに打太刀は
	去りもせず来りもやらぬ心をば	つるぎとてなはに似たるはなにならず	慈悲ごころ其儘太刀に切出せ
	げだんにもかまゆる太刀はありけれど	むつかしく習ひもて行其おくに	りありとて引しりぞきて打太刀に
	うしろより敵のかからばいくども	まだきより刀をぬくな敵あひの	もろもろの仏の心ことばをも
	りこんだて太刀の味にはいらぬ也	太刀のつばはづして打は当流の	まことある心にはとき味としれ
	えらびても人の心をえらぶべし		

各々の譬喩の心持	三戈の心持	蟹歩の心持	斗力の心持	見の目付の心持
	観の目付の心持	蛙の目付の心持	内の声の心持	骨合の心持
	七力の心持	左肱切断の心持	立の心持	雙の心持
	越の心持	横指の心持	寸の心持	満の心持
	煎の心持	平の心持	安の心持	行の心持
	雲耀の心持	軽の心持	道の心持	眞の心持

五躰成就	①地　方　　我覚本不生　歌2 ②水　円　　出果語言道　歌1 ③火　三角　所果得解脱　歌1 ④風　半月　遠離於因縁　歌1 ⑤空　団形　智空等虚空　歌1

抑当流の大意者味也。心と云は仏也。法也。味と云は心也。伝法と云は本来の面目也。其本来の面目は，父母末生已前より動かざる物也。其面目相見のために，をよそ参禅学道の倫（ともがら）初心の時は座禅を尊とす。それ座禅とは……

右当流之奥儀書也。御執心仍レ不レ浅奉二進献一二之一御直子御一人之外御免許有間敷也。

寛永16年3月吉日　　東郷肥前入道

重位　印　（花押）

進上　忠時尊翁　様

表4　示現流兵法切紙　元和7年3月吉日

条　々

声の事	躰　の　息 用　の　息	歌一編
我々不知鬼神不知若主非レ主		
七熟脛胎	天，炎，早，土，多，力，息	
二橋之事に又一説有	阿（あ）浮（ふ）羅（ら）曇（どん） 訶（か）羅（ら）藍（ぎん）	歌一編

五　台

地　あ　黄　我覚本不生 方		歌二編
水　び　白　出果語言道 円	更井辺聞二落葉一 既驚至二秋色一	歌一編
火　ら　赤　所果得解脱 三角		歌一編
風　うん　黒　遠離二於因縁一 半月		歌一辺
空　けん　青　智二空等二虚空一 団形		歌一辺

表5　示現流聞書喫緊録　上

臂　　喩	
汀江放船 汀は水涯，敵に向かうはじめ。 放船はともづなを解き，船を押し出す。 目と目と見合，蹈寄り敵を切臥る。迅速に打留る味。	月船君 身船我 聞二一生一　心 聞二一季一　・ 聞二一月一　意 聞二一日一　・ 聞二一瞬目一　識 月船君は母の胎内で無念夢想，意識なし，胎内9ヶ月，工無き躰を推尊して君，万物の中で高上の形，身船我は出生後の意識知覚ある姿。意識の欲工。世上を渡るを卑下これを身船。
三才（日　月　星） 日，月，星は天に羅り，自然にして不レ工昼夜四時と流行循環して万物を照し育して不レ為成就といふことなし。	天地人の三才 心役レ形則不才也 心勝レ形則不才也 天は昼夜四時流行循環して物毎に不成就と云ふことなし，これを天地の才。人は天地の道理に順ふて以て一身の本性を成就すという(仁義礼智信)心勝レ形則才也は水心明然として為二情欲一無被レ覆也。 心役レ形則不才也は行燈の中に雖レ有レ灯，紙を以て百重重張隠したるが如く心光を閉ぢ塞ぎ獣に陥入たる也。

示現流聞書喫緊録　上

臂　　喩	天明元年11月24日
二橋，人無二憂戚一して楽は地橋。 有二病痛一苦は天橋。天気清明成るは地橋。風雷の日は天橋。打臥幼弱は地橋。 打二臥大力大勇の早業一は天橋。	三寸丈五の橋，乾一筋懸可二心渡一也。坤一筋懸可二心渡一也。 天の橋渡即ち意識取付け不レ能レ渡，是則ち味也。 地の橋渡則ち意識免得レ渡，是則ち味也。 三寸丈五の意味。 人身母の胎内に胞生の間，眼，耳，鼻，舌，意の五根生ずる度に髪の毛三分づつ生ずる。3×5＝1寸5分生じたる解き，五根成就し誕生する。三分倍して三寸，1寸5分を倍して丈五。巾三寸の橋を高さ一丈五尺に掛けるのを乾一筋懸る，天橋。地に懸るを坤に一筋懸る，地橋。
二字之味 忠・孝 父母の恩，天より高く地より厚し。故に自然に出て工無く，不レ動者。仕二君父一生二利心一以二二時一示レ味。	忠孝 忠孝をしていることを知ってもらう，あるいは知ってもらわないとすれば心が動くので忠孝ならず，知らず厭わずにすれば，心動かないので忠孝。

示現流聞書喫緊録　中

臂	喩
六道，刀之柄，譬 敵を殺すべしと太刀をとった時の味より，打臥するところまでの味を太刀の柄につけて解く。柄握に6つの意地がある。	地獄，餓鬼，畜生，修羅，人界，天人界 仏道の六道から案出したのでなく，元々六つの意地があり，これに六道が合ったので，これに準模した。この握をたいていにすれば，勝ち得ない。
割レ時悟レ味之事，蜻蜓打の遅速寄足の遅速， 時割の教は手足の業，論二遅速一に始まりて令下至二雲耀一終の教上。	時割八，一刻也。 八刻二十八分挙成一時也。 一割八十四一分也。 一分当たり，一息脈四動版也。脈一動，盛風力之人之二足半歩也。 分八配一秒也。 費十配一絲也。 絲十配一惣也。 惣十配一毫也。 毫十配一釐也。 雲耀

示現流聞書喫緊録　下

臂			喩
初段	左臂切断 二祖之断臂 臂を用心して敵の臂を切断する打。	立	破レ人為レ人，生為レ人 心立亡レ敵，本立成レ道， 五音相通，五音相通
		双	五音双通，尽蠖縮レ身 為レ延二其身一盛風力
		越	五音双通，一円双 観の目付，月船姿羅奢伝 出　宅
二段	横指　天父 横切　地母 太刀柄のもち方	寸	迫則有二方寸之内三輪苦一
		満	開則満二三千大世界一 孩児取レ月抛二銀盤一
		煎	出二火宅一
			重類，傍布 入星仏心見顕 明星時々出現 衆生日々行動